



TITLE:

統計拾穂抄(六)

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 統計拾穂抄(六). 經濟論叢 1927, 24(2): 411-414

ISSUE DATE:

1927-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128503>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 二 第

卷四十二第

行發日一月二年二和昭

論 叢

印紙稅廢止論

教授 法學博士

神戸 正雄

生物の美的進化

教授 理學士

川村 多實二

露西亞の新經濟政策と農業

教授 法學博士

河田 嗣郎

說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田島 錦治

英國勞働黨の銀行國有論

助教授 經濟學士

谷口 吉彦

物價指數の意味

講師 經濟學士

蜷川 虎三

雜 錄

町人の財力と士農兩階級

教授 經濟學博士

本庄 榮治郎

Populationistik につきて

教授 法學博士

財部 靜治

英吉利の國際海運收入

教授 經濟學博士

小島 昌太郎

獨逸帝國銀行の發券制度

助教授 法學士

汐見 三郎

法 令

健康保險特別會計規則・健康保險法施行規則

統計拾穗抄 (六)

財部 靜治

九 Populationistik に就きて

雜錄 統計拾穗抄

人口の學問的研究上、人口統計論、¹⁾人口論詳言すれば人口増減に關する學理を、専ら生存資料との關係に着眼して、研究せんとする部面及人口政策論の三別を付し得べきことを認めつゝ、人口統計論は之を、我國にても弘く讀まるゝことゝなりてより歳久しき、著書「經濟學大全」第四卷「統計學」中に取扱ひ、他の二編につきては、理論及政策論の關聯を裂かす、説明の重複を避けんとする、實際上の理由に基づき、多年に亘り右大全第二卷「經濟政策論」中、一括して之を取扱ひ來りし J. Conrad は、當該編の總稱として Das Bevölkerungswesen を使用し、之を人口論及人口政策論の二章に分てると共に、その初めの章には人口論一名 Populationistik と題したり、而してその所謂人口論又は人口學の何たるかにつき、同章劈頭に説ける所によるに、そは人口及その發展の條件、並にその經濟的、政治的意義に關する學理にして、經濟學の一部なり、素より Rümelin は之を經濟學の一部と、觀想することを欲せず、寧ろ經濟學に對す

る特殊の一補助學たらしめんとし (Schönberg 經濟學全書第一卷第四版一八九六年刊行中に收むる同氏人口論參照) Adolf Wagner も亦大體に之に賛成せり、二學者が此意見をとるに至りしは、人口論と全然分つべく、兎に角獨立に編成處理するの要ある人口統計論を、別編として之に結付けんとするの、一理由のみによれるものたり、されど人口密度の意義、及之と關聯せることに關する理論的説明は、經濟學より引離すを得ず、蓋し民衆は第二の生産因子たる人の勞働を授け、同様に又消費者として、國民經濟に全方針を授くればなり、故に經濟學上之を不問に付し難しとせり。(特に前記經濟政策論第八版一九二〇年刊行四八九頁參照)

Conrad がその著經濟學大全中に、「統計學」を加ふると共にその一部門として、人口統計論を取扱へること、系統論として果して穩當なるやにつきても、先づ評論を挿むべき餘地あり。されどその點は今姑らく之を不問に付しつゝ、考ふるに、兎に角別にその經濟學系統論中の尠から

ざる頁を、人口論及人口政策論のために割きたるは、その初版を夙に一八五四年に公けにし、その中に人口研究論を特に根本的に試みたる、古大家 Wilhelm Roscher, Grundlagen der Nationalökonomie の先例に倣ひしものと謂ふべし (cf. Moser, Bevölkerungswissenschaft, S. 13) 夫れ第一に人口増減に關する學理及政策を、從來普通に行はれ Conrad も亦その例に倣ひし如く、經濟學の一系統論中に羅致するを可とすべきや、或は經濟學を離れ別に人口學の獨立研究を期し、經濟的考慮以外に弘く社會學的考慮を加へつゝ、之を以て一層該博なる研究物體たらしむる、可とせざるやにつきて、學問進歩の現況上重視すべき一問題あり、第二に Conrad が Rümelin に加へたる前記の略評は、果して懇切を得たりとなし得べきや、疑問なき能はず、此二疑點たる特に吾人が重きを置かんとする所、而して又之につき聊か私見を持すと雖も、之が詳論は本短編の企圖する所に非ず、寧ろ茲に直接目的とする點は、Populationistik ても語の由來を、略説す

るにあり、されどその以前に尙注意しおきたきは、Conrad 經濟學大全に於ける材料編次上、同第一卷經濟原論 Nationalökonomie-Allgemeine Volkswirtschaftslehre 第十版一九二二年に發行せられし以後、從來第二卷經濟政策論中に取扱はれし、人口叙説の大部分が同原論中に遷され、「國民經濟の基本」に關する説明の一部を組成するに至り、「社會秩序」に對立せしめたる、「自然及經濟」てふ總題名の下、(4)人口の現勢及類別(ロ)人口増加(ハ)移住として取扱はれ、唯殖民政策のみは從前の如く、經濟政策論中に存置せられしも、商政に附して之を説くこととせると共に、「人口論」の所屬に關する略説として、前に引けるが如きものは、省かれたることなり。

人口統計論と人口論 Populationistik とを、分説すべしとするの意見を唱導し、前者は諸事實の探求、その根本的闡明、及要覽的配列のみに當るべく、後者は人口の種々なる現象を、惹起すべき普通自然法の究明及立定に當るべしとせ

るは、R. v. Mohl, Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften. III. Bd. 1858. S. 415 ff. なるが、惟ふに Conrad は、その説に動かされたるものなるべし、されど此説の如くんば統計論の研究上、常例及常理の立定に及ぼすことは、之を斷念せしが如き外觀を呈するに至らん。抑も v. Mohl が右の如き、不便なる區別を立つるに至りしは、惟ふに用語 Populationistik の發明者たる Christophe Bernoulli, Handbuch der Populationistik oder der Völker- und Menschenkunde nach statistischen Ergebnissen. 1841 (藏書は同書中の前半に屬し、後田 Wappäus により唱導されし、「普通人口統計論」的研究の先驅を、なせりと評し得べき) 總論的研究 Populationistik oder Bevölkerungswissenschaft. Erste Hälfte. Allgemeine Bevölkerungsstatistik. 1840 の部分に限るべき情むべしと雖も、同書が今日獨逸語人口論として行はるる諸國に於ても、逸書として遇せらるゝの事實に照せば、聊か慰むべきものあるを覺ゆ) に促されたるものなるべきも、本書に就きては尙附言する所なくして、己む能はず。cf. v. Mayr, Bevölkerungsstatistik. 2. Aufl. I. Lief. S. 7.

putationistik を以て v. Mohl 等了解せんとせるが如く、山來主として經濟學者により開拓されし人口論の、別名に當てんとせる者に非ず、恰も人口統計論を右の如く狭く觀じたる同一事由のため、その統計的研究を比較及窮理に及ぼすべき部面に就き、此新名目を冠せんとせる者なり、即ち唱へて曰く、「人口に關する諸經驗、諸事實及諸研究を、凡て獨立固有の一學又は一學科中に併合し、之を人口學と呼ぶは、適切なるに似たり」と、而も亦人口統計は常に斯學の要部を占め、その基本をなすべきこと、さればどて斯學の研究上、統計材料を最初に又他と引離して總括するは、不便とすべきことを附説し、殆んど一切の人口學的研究が、終始統計材料に立脚し、その研究はかゝる材料を待ちて、始めて確實なる意義を、有するに至るべきを以てなりとせり（同書三及三頁）看る可し v. Mohl 提唱せるが如く、敘事的人口統計論を形式的に引離し、人口學以外に立たしむることは、Populationistik の父たる Bernoulli の預り知らざる所なるを、同

人の意中に宿されたる同語は、主として人口統計に立脚すべき人口學と同義なり、吾人はかく觀し來ると共に、一面には Populationistik てふ異名を、人口研究のために存続せしむべき、特別理由を發見するに困しむや Demographie てふ名目に於けると、異なることなきを想ひつゝ、他而右 Bernoulli の研究が、Wappaus による人口研究の「先驅として、嚇灼たる光輝を、同國統計學史上に放つことを、羨望せずんば非ず。

(cf. Wolf, Theoretische Statistik, S. 134)

附記。本書二三卷一〇二四頁上段二三行中、「Geology」を「地文」とあるを「Physical Geography」を「地文」「Geology」を「地質學」に訂正す。